



Data

監督・製作: ベテル・ベプヤク
 脚本: ベテル・ベプヤク/トマーシ
 ユ・ボムビク/ジェセフ・パ
 シューターカ
 出演: ノエル・ツツオル/ベテル・
 オンドレイチカ/ジョン・ハ
 ナー/ボイチェフ・メツファ
 ルドフスキ/ヤツェク・ベレ
 ル/ヤン・ネドバル/フロリ
 アン・パンツナー/ラース・
 ルドルフ

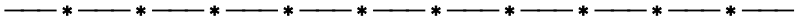
👁️👁️ みどころ

映画は勉強。それが私の持論だが、「ホロコーストもの」はとりわけその色が強い。しかし、「アウシュヴィッツ・レポート」とは？

それは、1944年4月にアウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所から脱走した2人のスロバキア系ユダヤ人が国連に提出した32ページのレポート。そこには何が？スロバキアやチェコは当時どんな状況に？本作は実話に基づく物語とされているが、前半の脱出劇はホントにホント？

命と引き換えに収容所の爆撃を！そう訴えた2人の訴えは叶えられなかったが、「アウシュヴィッツ・レポート」の成果と限界は如何に？私たちはその教訓をどう学べばいいの？

本作ラストに聞こえてくる現在のリーダーたちの肉声に注目！いずれもヒトラーの雄弁ぶりに近いが、彼らのアピール政策の是非は？それらに対して、各国国民が下すべき理性的判断とは？



■実話に基づく物語！アウシュヴィッツ・レポートとは？■

本作の邦題『アウシュヴィッツ・レポート』は、英題の『The Auschwitz Report』そのまま。そして、Wikipediaによると、「アウシュヴィッツ議定書はアウシュヴィッツ報告書とも呼ばれ、もともとアウシュヴィッツとビルケナウの絶滅収容所として出版され、第二次世界大戦中にドイツ占領下のポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所内で起こった大量殺人事件について、1943年から1944年にかけて3件の目撃証言が集積されています。目撃者の証言は、個別に Vrba - ウェツラー報告書、ポーランド少佐の報告書、およびロジン・モルドヴィッチの報告書として知られている。」と解説されている。

また、チラシには、「1942年にアウシュヴィッツに強制収容された二人の若いスロバ

キア系ユダヤ人は、1944年4月10日に実際に収容所を脱走し、アウシュヴィッツの内情を描いた32ページにも渡るレポートを完成させた。収容所のレイアウトやガス室の詳細などが書かれたレポートは、非常に説得力のある内容で、このレポートは『ヴルバ＝ヴェツラー・レポート（通称アウシュヴィッツ・レポート）』として連合軍に報告され、12万人以上のハンガリー系ユダヤ人がアウシュヴィッツに強制移送されるのを免れた」と解説されている。

さらに、パンフレットにある「Vrba - Wetzler Report」では、それが詳しく解説されているので、これは必読！なるほど、なるほど。

いわゆる「ホロコースト映画」は毎年たくさん作られているが、それは人類がホロコーストの教訓を忘れないようにするためだ。しかして、本作冒頭には、「過去を忘れる者は必ず同じ過ちを繰り返す」というアメリカの哲学者ジョージ・サンタヤナの言葉が字幕表示される。さあ、『アウシュヴィッツ・レポート』と題された本作に見る、“実話に基づく物語”とは？

■なぜスロバキア・チェコ・ドイツ映画に？■

私は2020年5月20日に『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集—戦後75年を迎えて—』を出版し、その《第2編 ナチス支配下のヨーロッパ各地は？》で、「第1章 フランスでは？」、「第2章 ポーランドでは？」、「第3章 オランダでは？ベラルーシでは？オーストリアでは？」、「第4章 デンマークでは？ノルウェーでは？フィンランドでは？」に分けて、計72本の「ホロコーストもの」を収録した。そこには、スロバキアもチェコも入っていなかったが、それは私が、当時のスロバキアやチェコの実情を知らなかったためだ。

本作の主人公は、1944年4月時点で、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所の遺体の記録係をしている男アルフレート・ヴェツラー（ノエル・ツツォル）とヴァルター・ローゼンバルク（ペテル・オンドレイチカ）。彼らは2人ともスロバキア系ユダヤ人だ。日本人は、ポーランド、ハンガリー、オーストリア、チェコスロバキア等の東欧諸国の地理や民族そしてその歴史などの知識に疎い。『サウンドオブミュージック』（65年）を観た人は、旧オーストリア＝ハンガリー帝国海軍の軍人であるトラップ大佐が、台頭してくるナチス・ドイツに抵抗してオーストリアからアメリカに亡命したことをよく知っている。しかし、チェコスロバキア共和国の成立（1918年）とその解体（1939年）や、ナチス・ドイツと保護領のチェコ、保護国家のスロバキアとの関係について知っている日本人は、私を含めて少ないはずだ。

私は『ヒトラーの忘れもの』（15年）（『シネマ39』88頁）を観て、はじめてデンマークとナチス・ドイツとの関係を、『ヒトラーに屈しなかった国王』（16年）（『シネマ41』未掲載）を観て、はじめてナチス・ドイツに対するノルウェーの抵抗を理解できたが、それと同じように、本作を観てはじめてナチス・ドイツのスロバキアやチェコに対する侵

略と支配の歴史を理解することができた。また、私は『サウルの息子』（15年）（『シネマ37』152頁）を観て、はじめて「ゾンダーコマンド」なるものを理解することができた。これは、ナチスが収容者の中から選抜した死体処理に従事する特殊部隊のことだが、本作にもその「ゾンダーコマンド」が登場するので、それにも注目！

本作で興味深いのは、「死体の記録係」なるものの存在。その役割がどんなものなのかは本作導入部でわかるが、アルフレートとヴァルターの2人は記録係だったため、「アウシュヴィッツ・レポート」に収容所施設の配置や「火葬場」の内部構造を示す図を添付したり、移送されてきたユダヤ人の出身地やおおよその人数に至るまで、詳細なデータを添付することが可能だったわけだ。パンフレットには、アウシュヴィッツとスロバキアの歴史を要約した「HISTORY」があり、また、2人の実際の逃走経路を描いた地図もあるので、それらを参考にしながら、収容所を脱出したアルフレートとヴァルターの2人がひたすら南に進み、スロバキアを目指したことをしっかり理解したい。

ちなみに、本作を監督した1970年生まれのパテル・ベプヤク監督は、チェコスロバキア（現スロバキア）出身だが、彼が本作の監督と製作に込めた思いは、「DIRECTOR INTERVIEW」の中で熱く表現されているので、これも必読！

■□■脱出劇は如何に？ヒリヒリする展開だが、これが真実？■□■

劇映画とドキュメンタリーの境界は難しい。また、映画はすべて採算性を考えた商業作品だから、商業映画として楽しめることが不可欠だ。とりわけ94分の本作は、前半の脱出劇と後半の「アウシュヴィッツ・レポート」の公表（アピール）に分けられているから、前半の脱出劇については、『大脱走』（63年）や『パピヨン』（17年）（『シネマ45』127頁）と同じようなエンタメ性が必要！そこまで言わないまでも、なぜ警戒の厳重な収容所からの脱出が可能になったかについての、手に汗握るようなハラハラ感・ドキドキ感は不可欠だ。そんな視点から見ると、本作前半の脱出劇は少し真実味に欠ける面も・・・？

アルフレートとヴァルターの脱走は1944年4月7日に始まったが、その計画は囚人たちが毎日駆り出される作業の中で積み上げられる木材の中に隠れ、隙を見て脱走しようというもの。したがって、私はそのお手並みに注目したが、映画はそこに焦点は向かわない。9号棟から2人の記録係が行方不明になったことを、同じ9号棟の囚人たちは知っているに違いない。そう考えて、9号棟の囚人たちから2人の情報を聞き出そうとする監視官のラウスマン伍長（フロリアン・パンツナー）と9号棟の囚人たちとの“心理戦”にパテル・ベプヤク監督は焦点を当てていくので、それに注目！アルフレートとヴァルターの情報を提供した奴は、命を助けてやる。それがラウスマン伍長が差し出した餌だが、さて「2人が見つかるまで外で立っている」と命令された9号棟の囚人たちはどうするの？点呼責任者の囚人は、「知らない」といくら弁解しても通用せず、木の棒で叩かれ殺されてしまったし、立たされている間に隠れてパンを食べ、仲間にも配っていた囚人パヴェル（ヤン・ネドバル）は棟の中に連れ込まれ、何とか2人の行方を吐かせようされたが、さて？

本作前半では、そんなラウスマン伍長と9号棟の囚人たちとの“心理戦”が描かれていくが、肝心の(?)アルフレートとヴァルターの脱走劇は如何に?積み上げられた木材の下に隠れているアルフレートとヴァルターがわずかしき動けないのは当然だが、犬たちの嗅覚はどうしてそこまで届かないの?また、その上に木材を積み上げられたら、2人の力でそれを下から動かすのは不可能だから、それにて2人はジ・エンド?そう思うのだが、スクリーン上はアレレ……。さあ、脱出成功!となったから、これでは少しリアリティに欠けるのでは?スクリーン上で描かれる2人の脱出劇は、ホントに真実に基づく物語?

■□■収容所から国境まで何km?山中の歩きは?遭遇者は?■□■

本作は冒頭に「真実に基づく物語」と表記されているが、そこでいう“真実”とは、収容所から脱出したアルフレートとヴァルターの2人によって「アウシュヴィッツ・レポート」が提出されたという大筋だけらしい。つまり、本作前半で描かれる、ラウスマン伍長と外に立たされた9号棟の囚人たちとの“心理戦”や、積み上げられた木材の下に3日も潜んで脱出を狙っていたアルフレートとヴァルターの姿などは、ペテル・ベブヤク監督が本作のために演出したものだ。そんな目で見ると、本作前半の脱出劇のリアルさに不満が残るうえ、収容所の最後のフェンス(鉄条網)を潜り抜ける姿も安易すぎる感がある。

さらに、私がスナナリ納得できないのは、収容所からスロバキアの国境まで2人がどうやってたどり着いたかについての納得感。スクリーン上では、木の実を食べた2人が下痢をしてしまう姿や、足のキズで歩けなくなってしまう姿などが映し出されるが、警備するドイツ軍の姿が全く見えないのはなぜ?そんな中、脱走日から10日目、疲労の中でほとんど意識を失ってしまった2人を救ったのは森の中で遭遇した女性だが、これって話がうますぎるのでは?さらに、周辺の地理を知り尽くしているというこの女性の知人男性によって、2人はスロバキア国境に近づくことができたからそれも超ラッキーだが、ホントにこれは真実に基づく物語?

脱走11日目、雪が残る山林を歩き続けているアルフレートはもはや体力の限界。何度も倒れながらも「急がないと、どんどん収容所で人が殺されていく」と自分を奮い立たせていたが、目の前に建物が見えた途端、その場に突っ伏してしまった。ところが、目を覚ますと、そこはベッドの上だったから、これも超ラッキー。なるほど、なるほど。そんなストーリー展開はよく理解できるが、ホントにこれも「真実に基づく物語」?

■□■タイプ打ちのレポートが完成!その信憑性は?■□■

やっと母国スロバキアに入ることができたアルフレートとヴァルターが、接見した弁護士から与えられたタイプライターで打った32ページのレポートが「アウシュヴィッツ・レポート」。そして、それを最初に目にしたのは、赤十字の職員ウォレン(ジョン・ハナー)だ。ようやく到着したウォレンに対して、アルフレートは「遅すぎる」と厳しい言葉をぶつけたが、その日、アルフレートとヴァルターから詳しい事情を聞いたウォレンの反応は?

破竹の快進撃でヨーロッパ全土を手中に収めたナチス・ドイツは、すべての国を直接支

配したわけではなく、フランスのビシー政権に代表されるように、傀儡政権を作っていた。その理由は、その方が支配するのが楽だからだ。また、ナチス・ドイツはスウェーデン、デンマーク、ノルウェーの北欧三国を占領統治したが、『アンウン・ソルジャー 英雄なき戦場』（17年）を観れば、対ソ連の東部戦線のため、ナチス・ドイツはフィンランドを占領しなかったこと、そして、フィンランドは、むしろナチス・ドイツの協力を得ながらソ連への反攻作戦（＝継続戦争）を遂行したこと、がよくわかる（『シネマ45』94頁）。それと同じように、本作を観れば、1939年に解体されたチェコとスロバキアが両国とも如何にナチス・ドイツに追従していたのかがよくわかる。

そんな状況下、いかにウォレンが赤十字の職員であっても、彼の耳に入っていた情報が丸め込まれた情報ばかりであったのは仕方ない。したがって、ウォレンが今アルフレートとヴァルターから聞く“生の情報”は驚愕すべきものばかりだったから、にわかになんかそれを信じられなかったのも仕方ない。しかし、何度も確認し、証拠物まで確認していくと・・・。

■□■レポートの成果と限界は？この教訓をどう学ぶ？■□■

アルフレートとヴァルターが脱走を決意したのは、自分の命のためだけではなく、収容所の実態を一刻も早く世界に伝え、収容所を爆撃してもらいたい、と強く願ったため。それによって、収容所の仲間たちが爆撃で死亡しても構わないという覚悟を囚人たち一同は固めていたわけだ。そのため、赤十字のウォレンから「君たちは何を求めるのか」と聞かれた2人は、その強い思いを伝えたが、さて、赤十字の対応は？そして、スロバキア政府の対応は？さらに、連合国の対応は？

『杉原千畝 スギハラチウネ』（15年）（『シネマ36』10頁）を観れば、「日本のシンドラー」と呼ばれた杉原千畝が、1940年の7月から8月にかけて発行し続けた「命のビザ」によって、計2139名の避難民を救出できたことがよくわかる。それに対して、“命と引き換えに収容所の爆撃を！”そう訴えた2人の訴えは叶えられなかったものの、「アウシュヴィッツ・レポート」によって得られた成果は、ハンガリーのブタペストからアウシュヴィッツへの移送が中止となり、約12万人の命が助かったことだ。「アウシュヴィッツ・レポート」のそんな成果と限界をどう考え、その教訓をどう学べばいいの？

■□■難民移民の排斥は？極右政党の台頭は？あの時と酷似？■□■

前述のとおり、本作の劇映画としての面白さはイマイチだが、興味深いのは、本作ラストに、現在ヨーロッパのあちこちで出現している「極右過激主義」や「排他主義」等々のリーダーたちの生の声が次々と飛び出すこと。アメリカのトランプ大統領の登場には賛否両論があるが、2016年5月9日の選挙に勝利してフィリピンの大統領に就任したロドリゴ・ドゥテルテ氏は「フィリピンのトランプ氏」と呼ばれている。それは、フィリピン南部ミンダナオ島にあるダバオ市で1988年に市長に就任してから、ずっと示してきた彼の政治姿勢が、「メキシコとの国境に壁を作る」、「イスラム教徒の入国を禁止する」など、過激な発言を繰り返して注目を集めてきたトランプ氏の姿勢と重なって見えるためだ。

内戦が続くシリアなど中東・アフリカからの難民や移民の増大に悩むヨーロッパの各先進国は、比較的それを受け入れているドイツを例外として、スペイン、イタリア等を筆頭に、難民・移民排斥の動きが強い。また、それはトランプ大統領の登場と活躍の中で加速した。そして今、ヨーロッパのさまざまな先進国ではさまざまな極右政党が台頭し、そのリーダーたちは、それぞれ勇ましい発言（アピール）を繰り返している。ペテル・ベブヤク監督の出身国であるスロバキアでも、2020年の議会では、極右政党が看過できない数の議席を獲得したようだ。

そんなヨーロッパの現状は、第一次世界大戦後、疲弊したドイツでナチス・ヒットラーが台頭した時の情勢に酷似していると指摘する声が多いが・・・。

2021（令和3）年8月11日記